
儚い現実の中で

risu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

儚い現実の中で

【著者名】

NZコード

1

【あらすじ】

兄が記憶喪失の物語 Bの物語

妹が両足が動かなくなつた物語 Cの物語

父が亡くなつた物語 Dの物語

同じ登場人物のはずが、物語によつて性格が変わる
そんな物語を描いてみました

Bの物語（前書き）

Bの物語 兄、浩太が記憶喪失の物語です
同じ登場人物のはずが、物語によつて性格が変わる
そんな物語を描いてみました

不意にわたしは兄の顔を見る。

居心地の悪そうに、兄は強張った顔で自分のベッドに腰掛けた。

「お兄ちゃん、大丈夫？」

わたしがそう尋ねると、兄は驚いたように身体を震わせ、

「あ、はい。大丈夫です。すみません」

そう答えた。

その兄の言葉を聞いた瞬間、心が締め付けられる。

「敬語やめてよ……わたしたち兄妹なんだよ？」

耐えきれなくなつたわたしはそう兄に告げる。

「す、すみません」

兄は申し訳なさそうに謝つてきた。

「……お兄ちゃん」

兄は変わつてしまつた。

「ご、ごめん」

そう、変わつてしまつた。

食卓

「うまいか？ 浩太」

父が兄にそう尋ねていた。

「あ、はい、おいしいです」

そんな父の問いに兄は他人行儀に答える。

「そう、良かつたわ」

母は笑顔でそう言つたが、心無しか皿が笑つてなかつた。

「……」

弟も静かに食事を済ましているだけ。

「 何もしゃべらなかつた。」

わたしの部屋に弟がやつてきたのは夜九時ぐらいだつた。
正直迷惑だつたけど、入れてやつた。

「お姉ちゃん」

弟はそう居心地悪そうに尋ねてくる。

「なによ」

正直、苛立つてたわたしはきつく返答した。

「気持ちはわかるけど、もう少し元氣だそうよ」

わたしにいつもの元氣がないのはお見通しか。

まあ、こんなにも不機嫌な態度を取つてれば誰にだつてわかる。
「わかつてゐるよ」

わたしは兄が大好きだ。正直、ブランと言つてもいいくらい。
だからこそ、兄に自分のことを忘れたことにショックを受け
ている。

そして、兄に甘えらないことがわたしを更に苦しめている。
「ボクたちがお姉ちゃんを支えていかなきゃいけないんだよ?」

「わかつてゐるつて言つてるでしょっ!」

見透かされたような気がしてつい怒鳴つてしまつた。

でも、抑えることなんて出来ない……感情が溢れてくる。

「わかつてゐるけど……でも……今のお姉ちゃん違つよ」

違つ……前のお姉ちゃんと全然違つ。

「他人行儀で……すつこに氣を使つてゐ」

兄妹なのに……昔はあんなに仲良かつたのにー。

「あんなの……わたしの知つてお姉ちゃんじやないよー。」

「……お姉ちゃん」

学校の下駄箱前。

わたしと兄は一緒に登校してきた。

「お兄ちゃん……大丈夫？ わたしついでに」
「まだ学校に慣れていないはずだ。

一昨日までは一緒に教室までついていった。

正直、上級生のクラスは怖かったが、兄を無事に教室に送り届ける為だ。

他の人ももう兄の事情については知っている。不思議がることはないだろう。

「あ、いや、大丈夫で
まだ敬語だ。

「と思う」

わたしが表情に出していたのか、兄は碎けた言葉に直す。
そんな姿がちょっと滑稽だったから、少し和んだ。

「でも、心配だよ」

兄は大丈夫というけど、わたしからしたら心配で仕方ない。
やはり、わたしがついて行つた方がいいかもしないな。

「おーい、浩太」

そんなことを考えていると、後方からそんな声が聞こえた。
「あ、哲さん」

振り返つて確認すると、そこには兄の友人の哲さんが居た。

「お、凛ちゃん、はよー」

「おはようございます」

相変わらず元気な人だ。

爽やかな笑顔をわたしに向かへ、挨拶をしてきたのでわたしも返す。

「浩太もはよー」

兄にも笑顔で挨拶。

「お、おはようございます。哲くん」

兄はぎこちなくそう挨拶を返す。

「……は、はは。お前に敬語でくんづけとか変な感覚だ」

兄の反応に哲さんは苦笑いを溢す。

「う、うめん」

また兄は申し訳なむれつな顔して謝る。

「いや、気にするな」

哲さんは何事もなかつたように笑顔で答える。

本当に、哲さんが兄の友達で良かつたと思つ。

「凛ちゃん、こいつは俺が世話するから心配しなくていいぜ？」

「あ、そうですか……じゃあ、お願ひします」

まあ、哲さんなら大丈夫だろ？

「じゃあ、凛ちゃん」

ちゃん……つて。

「ちゃんづけやめてよ」

「あ、「めん。えつと……」

ついきつい言葉で返してしまつた。

「呼び捨てでいいから」

「あ、うん。凛、行つてくるね」

やつぱり、呼び捨ての方がしつくつくる。

「うん、行つてらっしゃい……哲さん、兄をお願いします」

「はいはい。任せました」

哲さんは元気に頷いた。

「なんでこんなことになつちやつたのかな」

わたしの部屋にまた弟がやって來た。

いつもは兄の部屋に集まるのに。

「それは……仕方ないよ」

弟はそう答える。……仕方ないか。

「そうだよね……あそこでお兄ちゃんが居なかつたら

そう、居なかつたら。

居なかつたらどなんことになつっていたのか。

「……」

弟は口を開かずしてこる。

「……お兄ちゃんについで一番悩んでるのはお母さんだよね」

「やあ、お母さんが一番苦しみでこる。

なのに、わたしは自分のことばかり。

「やめよ!!……ボクたちはお兄ちゃんを支えていく、それでいいじ
やん」

「……」「めんど。わたし、お姉ちゃんなの!」……」

わたしなんかより弟の方がしつかりしてこるかもしれない。

「いいよ……お姉ちゃんがお兄ちゃんのこと大好きなの知ってるし」

「べ、別にそういうわけじゃ」

な、なに言に出しているの?」の馬鹿ば。

「ボクはお兄ちゃんもお姉ちゃんも大好きだよ?」

え……?

「例え、記憶が無くなつて……ボクたちとの想い出が無くなつても

「……弟」

やうだよね。辛いのはわたしゃお母さん、お兄ちゃんだけじゃな
い。

弟だつて辛いんだ。

わたしが、わたしがしつかりしないと。

家 リビング

「おーい、凛」

「なに? お父さん」

リビングのソファーで漫画本を読んでいると父が話しかけてきた。

「ちょっと、倉庫から探して欲しいものがあるんだが、頼まれてくれるか?」

「えー自分でやつてくれー」

正直、めんどうでこ。今、いじりだし。

「お父さん、ちょっと今から家を出ないといけない用事があるんだ

よ

用事？仕事かな？

「それなら、弟に頼んで……それかお兄ちや……」
いつもの感覚で言ってしまった。

そして、後悔する。

「弟は今居ないんだよ。浩太か……浩太に頼むか」

「いや、いい。わたしがやるよ……なに探せばいいの？」

兄は記憶喪失なのだ。倉庫の場所なんてわからぬだらう。
それに……わたしは兄を支えていきたい。

「ああ、えつとな、木箱みたいなのが倉庫の奥の方にあるはずなん
だよ。それを取り出してくれ。倉庫の前に置いといてくれれば良い

「了解」

えつと、木箱を探せばいいんだよね？

それを倉庫の前に置くつと。

「それと注意しろよ？ 物がたくさんあるからな。あの倉庫は父さ
ん達が住む前から、おじいちゃん達が使ってそのままだからな」

「整理しなよ」

そのまだから危ないんだって。

「そのうちな」

「……もう」

絶対する『気ない』な。

倉庫内

「物あり過ぎ……」

整理整頓など一切されてなく、『じちや』『じちや』に物が置かれている。
埃っぽいし、最悪。

「こんな中から木箱探すの？ めんどくさいなあ」「
わたしは溜息をつきながらも作業に移つた。

「あつたつ」

木箱だ。意外と手前の方にあつて見つけやすかつた。

「ふう……疲れた」

ちょっと、汗搔いたかな。暑い。

「えつと……これでいいんだよね？ すりじく古いけど」

おまけにボロボロだ。

「まあ、いいか。違つてもわたし知らない」

違つてもわたしが困るわけじゃないらしいでしょ。

倉庫前

「外に置いとけばいいんだよね」

そう言つてたよね、確か。

「木箱の中になにが入つてるんだろ？」

こんな古い木箱なんかなんで必要なんだろう。

中になにか重要なものが入つてるとか？

「……気になる。ちょっと、覗いてみよつ」

好奇心に負け、わたしは木箱をあけることにした。
蓋を掴み、ゆっくりと開ける。

Bの物語（後書き）

他に妹の凛が両足が動かなくなる物語 Cの物語
父が亡くなつたDの物語がを書く予定です

Cの物語（前書き）

Cの物語　妹、凜の両足が動かなくなつた物語です

「……凛」「

俺は妹に話しかける。

「……なに」

妹は不機嫌そうに返答。

「いや……」「

俺はなにも言えなかつた。

「……」

妹は両手でタイヤを漕ぐ。

しかし、非力なこいつの力では思つようにスマーズ動かない。

「俺が押してやるよ」

俺がそういうと妹はタイヤから手を放した。
後ろから取つ手を持ち、押す。

キコキコといづ音が虚しく廊下に響いた。

「はあ……」

俺は思わず溜息を吐いた。

「お兄ちゃん、大丈夫？」

そんな俺を心配したのか弟が話しかけてきた。

「ああ、大丈夫だ。でも、凛が心配だな」

昔はあんなにも明るかつたのに。

今ではそんな素振りは影も形もない。

「仕方ないよ……」

弟は辛そうな顔でそう呟く。

「車椅子ってあんなにも苦労するんだな」

体験してようやくわかった。

もし、街中で車椅子で苦労している人が居たら、手助けしたいと思つ。

「俺達が支えていかなきやな、勇太」

「……そうだね」

俺の言葉に弟は少し間を置いて頷いた。

夜 11時。

元の父の部屋、今は俺の部屋だ。

妹のわがままで俺の部屋はここになった。

そんな部屋でくつろいでいると、コンコンとこつ扉を叩く音が聞こえた。

「……ん？」

誰だろうか？ こんな時間に。

弟？ 母？ 父？ それとも……

「お兄ちゃん？ 居る？」

やはり、妹だったか。

「ああ、どうした？ トイレか？」

トイレに行く時、時々、起こされてついていくことがある。

「ううん。違う。開けて？」

違うのか？ ジャあ、何の用だ？

「ああ」

怪訝に思いながら扉を開ける。

「……」

キコキコと車椅子を動かしながら、俺の部屋に入ってくる。

「どうした？」

「お兄ちゃん、一緒に寝たい」

俺の問いただす妹は答えた。

「え？」

「いいでしょ？一緒に寝ても」

俺の戸惑いに妹は不機嫌そうな顔をする。

「いや、でも、ベッド狭いぞ？」

「狭くてもいい」

狭くてもいい……」のベッド、シングルだから本当に狭いんだよな。

落っこちても困るし……。

なんとか説得するか。

「でもなあ、お前の部屋の方がトイレとかリビングに近いし、なにかあつた時

「一緒に寝たいの！」

必死の形相で妹は怒鳴ってきた。

「一緒に寝てよー。お兄ちゃんにはその義務があるんだよー？」

「……凜」

「折角お兄ちゃんが戻ってきたんだもん……甘えさせてよ

「……」

「お兄ちゃん……お兄ちゃんはわたしに恩があるんだよ？」

「……わかったよ」

俺はただ頷くことしかできなかつた。

妹を抱え、先にベッドに寝かせ、その後に俺がベッドに入つた。

「お兄ちゃん、お兄ちゃんっ」

妹は俺の身体にしがみついてくる。

「お兄ちゃん……お兄ちゃんっ」

更に俺の胸に顔擦りつけ、匂いを嗅いできた。

「お、おー、そんなに抱き付くなよ」

流石に焦つた俺はそう妹を諭す。

「いいじゃん、兄妹だよ？」

しかし、妹は気に入らなかつたのか不快そうな表情を浮かべる。

「兄妹でも……やつ過ぎだ」

「……なにそれ」

一気に冷めた表情へと変わる。

「お兄ちゃんはわたして恩があるの」「やんな」といつんだ
そんなことを告げる。

恩つてなんのことだよ……俺は妹に恩なんではない。

「前から思つてたけど、その恩つてなんだよ」

「恩は恩だよ。お兄ちゃんはわたしに一生返せない恩があるんだよ
最近いつもこれだ。

「だから、もつと優しくしてよ、甘えさせてよ、お兄ちゃんつ
そう言つて俺の身体にしがみつく。

まるで見捨てられることあるよつ」と

「……」

「妹は変わった……」

弟の部屋のベッドに腰掛け、俺はそつ咳いた。

「そう……だね」

その咳きに弟は答えてくれる。

「昔から甘えん坊だつたが……」

「今は異常なくらいお兄ちゃんに依存している」

俺が言おうとした言葉を弟が紡ぐ。

「気持ちちはわからなくなるが……」

確かに気持ちちはわかる。

両足が動かなくなれば誰だつて、暗くなる。

誰かに依存したくなる。

それでも……あいつは異常だ。

「それに執拗に俺は妹に恩があると言つてくるの」

「恩つてなに?」

「知らない。でも、執拗に言つてくるだ

そう、執拗に。

毎日、毎日。

まるで俺を責めるようだ。

食卓

「はい」

母が父に茶碗を渡す。

「おひ

父が受け取る。

「はい」

母が俺に茶碗を渡す。

「さんきゅう」

俺はそつ言ひて受け取る。

「はい」

母は弟に茶碗を渡す。

「あつがとつ」

弟はそつれを言ひて受け取る。

「はい」

母は妹に茶碗を渡す。

「お兄ちやこに渡して」

妹は受け取らず、そつ吐いた。

「え？」

そんな妹の言動に母は困惑する。

「お兄ちやこに食べさせないから
ここにつけ……。

「おこ……手は使えるだろ」

俺は責めるよつそつ指摘してやる。

「使えるから？ なに？ 食べさせてよ」

しかし、妹はまるで堪えてないかのようにそつ吐いた。

「あのなあ」

イライラしてきた。

なんで、こいつは……。

「なんでそんな顔するの？ 恐いよ……お兄ちゃん」「本当ににもわからないという表情を浮かべている。

ずっと募っていた不満が沸々と沸き上がりてくる。

「俺はお前のお世話係じゃないんだぞー 出来るこじへり自分でやれ！」

そして、ついに爆発した。

「浩太っ、やめなさい！」

父に制され、俺はなんとか落ち着きを取り戻そうとする。

「なんで？ なんでお兄ちゃんは怒鳴るのー？」

「こいつー まだわかつてなかつたのか！

「それはお前が」

「お兄ちゃんはわたしに恩があるのー！ そんなこと言わないでよー！」

またそれかよー！

「お兄ちゃんがお兄ちゃんじゃない時はわたし頑張ったのにー！」

「お前、またそんなわけわからんことを」

「お兄ちゃんの馬鹿っ！ これなら前の方が良かつたっ！」

妹は車椅子を自分で動かし、扉の方へと向かっていく。

「お、おー……」

「……っ」

バタンッという扉の閉まる音だけが食卓に響く。

「……はあ」

俺はテレビを観ながら溜息をついた。

「浩太、ちょっと、いいか?」

そうしてると父が話しかけてきた。

「あ、うん、いいけど」

「ちょっと、頼みたいことがあるんだ

頼み?

「なに?」

「ちょっとな、倉庫から探し物してくれないか?」

「探し物? なにそれ」

倉庫を探し物つて。

「ああ、木箱を探して欲しいんだ」

「木箱?」

なんだそりや。木箱が必要なのか?

「倉庫の奥にあると思うんだが……昨日探したんだが見つかなくな
てな。見つけたら倉庫前に置いといてくれればいい」

「いいよ、今は暇だし」

いつもは妹の世話を追われてたけど、今は絶賛喧嘩中。暇だ。

「……早めに仲直りしろよ」

「わかってる」

父には俺の気持ちがバレていたようだ。

「じゃあ、頼む。物がたくさんあるから注意しろよ」

「はいはい」

「詰め込みすぎだろ……ちょっとは整理しろよ、父さん」

倉庫内は「ゴチャゴチャ」と物が置かれていて、埃っぽかった。

「はあ……探すか」

めんどくさいが探そう。

「これが？」

しばらく漁つていると古いボロボロの木箱を発見した。

「これっぽいな」

外に出て、倉庫前に置いとけばいいんだよな？
俺は倉庫の外に出ると、改めて木箱を確認する。

「うーむ、それにしても古いな」

ここまでボロボロになるくらいだし、相当昔の物だらう。
ちょっと中覗いてみるか？」

「ちょっとと蓋を開けてみる。
ゆっくりと蓋を開けてみる。

「ん？ 本が入ってる」

中には古本が入っていた。

「……ボロボロだな」

本に触れ、表紙を開く。

「中はなにも書いてない……白紙か」

黄ばんではいるが、どのページにもなにも書かれていない。

「こんなん必要なのか？ 父さん」

「なんに使うんだろう？ こんなもの。
まあ、いいか」

パターンッと本を閉じる。

「ここに置いとけばいいんだよな？」

木箱に戻し、蓋をして倉庫前に置いた。

家 リビング

「……あんま面白くないな、テレビ」

ブルルンという車のエンジン音が外から聞こえる。

「ん？ 父さんが帰ったみたいだな」

しばりべレビを鑑賞していると、扉の開く音が聞こえた。

「ふう……疲れた」

父は汗をハンカチで拭いながら、そう呟いた。

「あ、父さん、木箱見つけておいたよ」

父が戻ってきたのを認めて、そう報告する。

「そうか、ありがとうな」

「うん」

俺は父の感謝の言葉に適当に頷いておく。

「じゃあ、早速見に行つてくるかな」

そう言って父はまた外に出た。

「あ、結局、あの本なんの本か聞けば良かつた」

今になつて思い出した。

あの本結局なんだつたのだろうか？

古くてしかも白紙。

「まあ、いいか、後で」

テレビの音だけがリビングに響く。

「凜の奴……まだ怒つてるかな」

怒つてるだろうな……昔から執念深いし。

「仕方ない……あやま

Dの物語（前書き）

父が亡くなつた物語です

「は……」「……」
兄は溜息をついた。
「お兄ちゃん……大丈夫?」
姉はそれを心配するように気遣う。
「ああ」
兄はそう頷いた。
「勇太もよく頑張ったな」
そう言つて、兄はボクの頭を撫でてくれる。
「……うん。お兄ちゃん、ぎゅっとしていい?」「おう」
ボクは兄に思いつきり抱き付く。
「あー、勇太だけずるい」
姉が不満そうな声を上げた。
「こらこら、お前はお姉ちゃんだら?」
苦笑しながら兄は姉を諭す。
「ただけど……」
姉はボクを羨ましそうに見つめる。
「お姉ちゃん」
「わっ……勇太」
ボクは姉に抱き付いた。
「弟が甘えん坊になっちゃったな」
「仕方ないよ」
姉はそう言つてボクの頭を撫でる。
「……そうだな」
兄は悲しそうな表情を浮かべ、そう頷いた。

「母さん」

兄が母を呼び掛けた。

「……」

しかし、母は反応しない。

「母さん、夕飯出来たよ」

そう兄が言うと、

「……」

母は反応しない。ずっと、テレビを見つめている。

「わたしたちだけで食べよう。後で食べるよ」

「そうだな」

「……」

家族三人の食事が始まった。

「……高校だけは卒業するか」

「うん、そうした方が良いよ」

「……すまんな」

「なんで謝るの？」

「いや、俺がしつかりしないといけないのに、元前回いつやつて頼つてばつかで」

「い、いこよ。お兄ちゃんに頼られるの嬉しいし」

「それに……お母さんがあんなだし」

「……ふたりで頑張つていこい！」

「……うん」

姉の部屋でそんなふたりの会話が聞こえた。

「寝るか」

「ンンンン」

「ん？ 誰だ」

「……」

「勇太」

兄はボクを認める少し驚いた顔した。

「お兄ちゃん、一緒に寝ていい？」

ボクは兄にそう尋ねる。

「あ、うん、いいぞ」

ボクは兄の身体に抱き付いた。

「お兄ちゃん」

ベッドに並んで横になり、そつ兄を呼び掛ける。

「なんだ？」

すぐ反応があつた。

「手繋いで」

「おう」

ボクの頼みをすぐに了承してくれた。

「……」

ボクは兄の手を握る。

すると兄も強く握り返してくれた。
安心する。すく安心する。

「寝たか？」

「……まだ」

しばらく経つて兄がそう尋ね、ボクは返答する。

「そうか」

「……」

不意に扉を叩く音が聞こえた。

「ん？」

兄はベッドから出ると、扉の方へ向かう。
そして、扉を開ける。

「い、こんばんわ」

扉を開けた先に姉が居た。

「どうした？」

「一緒に……寝ていい？」

兄の問いに姉はおずおずとしおびた。

「お前もか」

兄は呆れたような顔をする。

「お前も？」

そう言って姉は部屋の中を覗く。

「……」

「あ、弟」

ボクを見つける。

「あいつもさつき来たんだよ
「……むわ」

姉は不満そうに唸る。

「なんでむくれてんだよ」

「べつに」

姉はふいと顔を逸らす。

「やそもそもか？ 自分に甘えてしないから」

「……ぐう」

図星だつたのか姉は言い返せず唸る。

「図星かよ」

兄は呆れた顔をする。

「やうたー、今度からお姉ちやんに甘えるんだよ？」

ボクは何度も頷いた。

「はあ……まあ、寝るか」

兄は溜息を吐きながら、じつひくと向かってくる。

「……」

姉は兄の手をぎゅっと握る。

「……」

ボクも兄の手をぎゅっと握る。

「……」

そんなふたりの手を兄は強く握り返してくれた。

「いつぶりだろ？ な」

兄が唐突にそつ込んでくる。

「なにが？」

姉が尋ねる。

「いやつて三人で寝るの」

「うーん……小学校以来？ 弟は幼稚園だけど」

兄の問いに姉が答えた。

「そんなもんか」

「……うん」

「……」

「お前らは俺が守るからな」

「……うん、頼んだ」

「……」

ボクは肯定を示すよじに強く手を握った。

家 リビング

「よつしー お前ら今日は休日だ！」

唐突に兄が叫ぶ。

「……うん、そうだけど、なんでそんなテンション高いの？」
姉は呆れたように兄を見つめる。

「それは俺が一家の大黒柱だからだ！」

その問いに自慢げに兄はそう答えた。

「……うざここと思います」

「……」

ボクと姉は兄に冷たい視線を送る。

「……ちょっと、調子に乗りました」

「で、なに」

仕切り直すよじに姉が兄に尋ねた。

「ああ、休日だし、掃除でもしようと思つてな

「えーめんどう」

姉は嫌そうに告げる。

「妹よ。兄と一緒に頑張ってくれるって言つただろう？」

「まあ…… そうだけど」

納得してなさそうに姉は呟く。

「だからこそ、俺達、兄妹弟愛を深める為にまず大掃除だ」

「なんで兄妹弟愛を深めるのに掃除？」

怪訝そうに姉は尋ねる。

「いいだろ？ 掃除は心を綺麗にするって言つし」「答えになつてないんだけど」

姉の視線は冷たい。

「あーもー、うるさい妹だつ。勇太は賛成だよな？」

ボクは頷く。

「ほら、勇太は素直だ。かわいい」

兄が撫でてくれる。

きもちいい。

「なつ……むう……わ、わたしだつて素直だし」

姉はそう言って、兄に近寄る。

「すり寄つてくるな、馬鹿」

「なつ」

ちょっととショックを受けたような表情を浮かべる姉。

「お前も撫でてやるから」

兄はそう言って、姉の頭を撫でる。

「……」

姉は撫でられると大人しくなつた。

「嬉しそうだな」

「う、うつさい！ 掃除するんでしょー。そつと役割決めてよー。」

姉は顔を真っ赤させながら、兄の背中を叩く。

「わ、わかった！ わかったから、叩くな！」

「おうつ、決めた」

しばらくして、兄がそう叫ぶ。

「早く発表して」

姉がそう兄を急かす。

「焦るな焦るな」

そう言いながら、兄は役割を書き込んだ紙を見る。

「えつと、凛、お前は風呂やキッチンを綺麗にしてくれ。後、キッ

チン棚の整理な

「うん、わかった」

姉は頷く。

「俺は窓や床、それからトイレ……後は色々だな」

「なにそれ」

兄の雑さに姉が突っ込む。

「つるさい。つっこむな」

「ボクは？」

このままだとまた兄と姉の喧嘩が始まってしまうので尋ねた。

「ん？ 勇太は……倉庫の整理してくれ。終わったら、俺の手伝い

「……わかった」

倉庫の整理か。

「よし！ 頑張るぞ！ 掃除で家族愛を深めるんだ！」

「……」

姉はキツチンへ、ボクは外へと向かった。

「あの……無視は悲しいかな、お兄ちゃん

倉庫前まで来ると、扉を開ける。

「……物多い」

倉庫内は物がゴチャゴチャと置かれていた。

正直、これを整理するのは相当な時間がかかると思つ。でも、兄に頼まれたことだし。

やひなこと。

「なにこれ」

倉庫を漁っていると、木箱が出て来た。

「木箱？」

とても古くボロボロだ。

なんとなく、興味が沸いたので開けみることにした。

「本」

中には古いボロボロの本が入っていた。
ゆっくりと手に取ってみる。

「……っ…?」

手に取った瞬間、辺りが真っ暗になった。
そして

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8586u/>

偽い現実の中で

2011年7月17日03時24分発行